

前崎先生より

前回、『国語辞典くらべ読み』を紹介したところ、非常に好評でした。

「国語辞典は調べるものではなく、読むものだったのですね」(Aさん)

「今まで辞書を作った人の思いまで考えたことありませんでした」(Bさん)

「高いなあと思っていた1冊1,800円が、安く感じました」(Cさん) など、多くのお声を寄せていただきました。第2弾は、それぞれのことばの意味とともに添えられている『例文』に注目してみました。例文とは、そのことばを文章でどう使うのかを示したものです。これがまたたまらなくおもしろいのです。今回のテーマは「打ち取る」です。野球に打ち込んできたわたしとしましては、あまりいいイメージはないこのことば。それぞれの辞書ではどのように書かれているのか気になりますね。

『打ち取る』

今回もわたしの解説とともにお届けします。

【Aの場合】

ピッチャーとして、最高に気持ちのいい瞬間
と言え、やはりバッターを三振で打ち取った
ときですね。「打ち取る」を使った例文としては
王道といってもいいのではないのでしょうか。

【Bの場合】

この例文を作った人は、おそらく右の強打者だったのでしょうか。バッターとしては打ち取られたくはありません。でも、このことばを説明しなくてははいけない。打った瞬間「おっ！ホームランか」と期待をさせたものの、惜しくもレフトフライ。一塁を回ったところで、がっくりと肩を落とす。そんな光景が目には浮かんできますね。

【Cの場合】

三振が王道の打ち取られ方であるとしたら、セカンドフライは、最も嫌な打ち取られ方であり、野球を知り尽くした人が作成した例文であることが想像できます。なぜ、数あるポジションのなかから、セカンドを……、しかも、フライを選択したのか。右バッターとして、セカンドフライで打ち取られたときほど、仲間や応援席のため息が聞こえてくることはありません。わたし個人としては、「打ち取る」と言え、やはりセカンドフライかなと。実際に、何度も味わってきました。

今回は例文を紹介しました。それぞれの国語辞典が例文に力を入れて作っているなんて話も耳にしたことがあります。皆さんも、ふと国語辞典を手に取り、何も考えずに読んでみてはいかがでしょうか。思わぬ発見があるかもしれません。

うちとる (打ち取る)	うちとる (打ち取る)	うちとる (打ち取る)
(例) セカンドフライに打ち取る	(例) レフトフライに打ち取る	(例) 三振に打ち取る
【国語辞典C】	【国語辞典B】	【国語辞典A】